「語り」の認知意味論
－〈対称性言語学〉の試み（その１）－

坪　本　篤　朗

0．問題の所在

経験基盤主義のアプローチと客観主義的アプローチとの違いは、生命体の性質や経験（特に身体の性質や行動の様式など）に基づいて意味を特徴づけることにある（Lakoff 1987, Lakoff and Johnson 1999)。身体は「もの」でもあるが、ただの「もの」ではなく、感受し、感覚するものである．部屋の中の机などと同じく、身体も「もの」であるが、身体の移動とともに部屋の見え姿も変化する、というように世界と独特の関係を持つ（メルロ＝ポンティ（1967)、熊野（2005)）．こうした身体の〈二重性〉は言語表現としてどのように反映するのだろうか．

アリストテレスの論理学の原則によれば、「同一律」や「矛盾律」などによってものごとは明確に分離した論理にしたがって「二項操作」が駆使されている．それに対して、いわゆる、〈複論理〉（バイロジック）の思考法というのがある．この論法は、先のアリストテレス論理学に見られるような徹底した「二項操作」による分離、区別に対して、要素間の〈同質性〉によってひとつの全体運動を見いだそうとする考え方である．このような見方をここで〈対称性〉と呼ぶとすれば、先のアリストテレス論理学に基づいた対象的で、分離を基本としたものの見方は〈非対称性〉に基づいた見方と言うことができる．人間の「こころ」あるいは認知の働きは、対称性の原理と非対称性の原理とが一緒になっていると考えられる（認知人類学からの観点として中沢（2004）参照)．対称性の考え方では無意識の働きを重視し、この点において Lakoff and Johnson (1999) のいう第二世代の認知科学と共通する。

カテゴリー分類に関しては、古典的カテゴリー論に対して、認知言語学ではプロトタイプ論が提案されていることは周知のことである．認知意味論において、ゲシュタルト知覚、身体運動、さらにイメージの形成を通じて現実世界の

事物は部分と全体の構造として取り扱う一般能力をもっているとされている(Lakoff 1987, 17章). 集合論的モデルは〈容器〉のスキーマに基づいて理解される. 〈容器〉のスキーマは、〈内部〉、〈境界〉、〈外部〉の構造要素の内部構造をもち、〈XはAの中にある〉あるいは〈XはAの中にない〉のどちらかである、とされる.

認知意味論では、知覚認識と言語的認識のあいだに構造的類似性があることが主張されている. 〈対称性〉に基づいて見た場合、認知意味論でいわれる〈容器〉のスキーマ、〈全体/部分〉のスキーマ、〈中心/周辺〉のスキーマなどについても違った捉え方ができる. 〈全体/部分〉のスキーマについても、身体を〈部分〉(たとえば、腕や足)をともなった〈全体〉とした身体経験にもとづいている、とされるのであるが、身体とその部位にいわゆる〈分離不可能所有〉の関係があることが十分に考慮されているとは言いがたい. これは、〈中心/周辺〉のスキーマについても同様である. 〈対称性の原理〉からみると、例えば、〈全体〉は〈部分〉でもあり、〈部分〉は〈全体〉でもある、というような見方となる. そのためには知覚との関係を取り入れて、〈全体〉と〈部分〉(あるいは〈中心〉と〈周辺〉)等の関係をもっと動的で有機的な関係としてみる必要がある. 〈対称性〉の考え方からみると、経験に基づく実在論としての認知意味論の考え方は十分とはいえない. さらに実在するものの根底を考える必要がある。

本論で取り上げる現象は、次のようなものである.

(1) a. レンコ、バス停に停まっていたバスに飛び乗る. 閉まるドア.
b. 予選トライアルの女子かじなしフォアで競い合う各チーム. (「朝日新聞」1991)
c. JFK暗殺を阻止できず、以来罪の意識にさいなまれれ続けるシークレット・サービスのホリン(クリント・イーストウッド). ある日、彼のもとに謎の男ミッチ(ジョン・マルコビッチ)から、現職の大統領暗殺を予告する電話が. (ビデオの説明文)
d. だれかの叫び声に振り向くと、鷲尾邸の方から、エンジンの響きも高く近づいてくる一艘の小舟. (江戸川乱歩「黄金仮面」)
e. 死んだ時間を重ねる渡辺. そこに突然、“生のイメージ”の笑い声が聞こえる. (「黒沢明と『生きる』」)

(1a) はト書きとして、(1b) は写真キャプション、(1c) はドラマや映画のあらすじの始発文、(1d) は「見る」ことが関わる小説の場面、(e) は映画製作に関わるドキュメント的解説などといったテクスト内で用いられている.

(1)のような例は、その意味的、語用論的性質として、モノ（個体）としての性質とコト（出来事、事象）としての〈両義性〉を持つ（ただし、同時に表すことはない. 例えば、坪本, 1993, 1995, 1998, 2000など. 次節で整理する). それらの諸特徴は〈存在〉に関わり、異質の要素のあいだに同質性を見いだす〈対称性の原理〉の立場に立つと、(1)のような例が、モノ（個体）とコト（出来事、事象）としての〈両義性〉を持つと考えることは不思議なことではない. (1)のような連鎖は、従来、〈喚体の句〉（山田（1937)）と呼ばれているのであるが、〈対称性〉に則した考え方によって、その原初的な存立構造を新しい観点から考えることにもなるであろう. それと密接に関係するのが、「物語」に対する「物語る」という言語行為であると考える.「物語」とはすでに完結した全体という「実体論的概念」であり、「物語る」とは物語るという行為を通して、生起した出来事を人間的時間の中に組み込むことができ、それは「口承言語」（昔話など）の伝達様式の存立基盤の原初性に通じる. 以下、「語り」と呼ぶのは、「物語る」という言語行為の重要性を意図している（野家 2005).

以上のような観点に立って、まず、第 1 節では(1)のような例の連鎖（XP-NP 連鎖）に関してこれまで別のところで述べてきた性質を簡単に整理し、これらの例がモノ（個体）のようにも、またコト（出来事）のようにもふるまう、という側面を押さえておきたい. 第 2 節では、「対称性の原理」についてその基本的な考え方を述べておきたい. 第 3 節では、XP-NP 連鎖の存立構造を、〈主語〉と〈述語〉の間の〈対称性〉の観点から、いわゆる〈一語文〉説との違いから考える. 第 4 節では、第 3 節での議論をふまえ、「語り」の言語行為の原初的な性質から XP-NP 連鎖を考える. 第 5 節では、「語り」の文体としての XP-NP 連鎖を時間の観点から考え、第 6 節では、XP-NP 連鎖の出自を〈格〉と〈自己〉あるいは〈主観性〉の観点から取り上げる. 第 7 節は、簡単に〈全体〉と〈部分〉の関係を〈対称性〉から考える. XP-NP 連鎖は、〈知覚〉／〈存在〉、特に〈時間〉／〈場所〉と密接に関係する構文連鎖である. したがって、「アフォーダンス理論」とも関連するところがあるが、本論はあくまで、〈対称性の論理〉から言語の志向性としての分節化の諸相を考える. そこでは、〈身分け空間〉、〈言分け空間〉、〈テクスト空間〉との有機的な関係が問

題となる．(1)のようなテクスト内で用いられる動機を考える．最後にまとめる．

1．ト書き連鎖（XP-NP 連鎖）の性質

本節で、(1)のような構文連鎖の諸性質を整理しておこう．（詳細は、以下の諸論を参照されたい．坪本（1992, 1993, 1995, 1998, 2000, 2001, 2002a 2002b, Tsubomoto（2000））．以下、(1)のような連鎖はト書きに典型的に見られることから《ト書き連鎖》と呼ぶことがある．ただし、ト書きだけに限定したものと誤解されるおそれがあり、以下、主に、XP-NP 連鎖と呼ぶことにする．しかし、以下の議論で明かになるように、ト書きが XP-NP 連鎖の原初的な存立構造にかかわる意味的・語用論的性質を反映した「語り」の文体の成立構造と密接に関係することを考えると、〈ト書き連鎖〉という名称はこうした連鎖の総称として的外れでないことが分かるであろう．本論では、日本語を中心に論じ、英語については、必要最小限にとどめる．上記の拙論のいくつかでは日英語比較が行われている．

A．XP-NP 連鎖にあって、NP は XP の表す意味に対して主語の関係にある．(2)は新聞見出し、あるいは写真キャプションから．

(2)　a．貴乃花を押す出す曙.
　　b．＃曙が押し出す貴乃花.

(2a) では NP が XP に対して主語の関係にあり、例えば、新聞のキャプションなどに用いられうるが、(2b) の NP は主語の関係になく、単独で用いられない．

B．XP は NP の一時的状態を表す．いわゆる、stage-level の述語であり、XP-N 全体で存在や知覚と密接に関係する出来事的意味を表す．

(3)　a．＃鼻が高い母親.
　　b．＃閉まるドア（に御注意ください）.

(3a) は、意味として曖昧である．ひとつは文字どおり母親の鼻が高い、ということであり、もうひとつは、比喩的に「誇らしい」という意味であり、前者の場合は恒常的性質で出来事的な意味を表し得ないが、後者の意味では出来

事的意味を表しうる．(3b) は、電車の案内であり、電車には開く側のドアと開かない側のドアがあり、開く側のドアに注意するよう喚起しているのであり、全体として出来事を表していない．この場合、XP は（もちろん、駅によってホームの位置が変わることもあるが）一応、恒常的性質を表していると言える．(1a) の場合には出来事を表していて、この点で異なる．

C．Bでも述べたが、XP-NP 連鎖は状況や出来事を表すことができる．これはコンテクスト次第であり、個体（モノ）としても解釈可能である．(4)はオペラ「アイーダ」の「あらすじ」解説文から．

(4)　a．驚き悲しむアイーダ．それを見たアムネリウスは心は密かに喜んだ．
　　b．（なんどやってもドアが閉まらないことに業をにやして）閉まるドアくらい買っておけよ．
　　c．土手に腰をおろし、恋を語るアベック．{それ／二人／彼等} をうらやましそうに眺めている源公．（実例では、「それ」）

(4a) では下線部（XP-NP 連鎖）に対し指示語「それ」が用いられている．この「それ」は人間（個体）を指示できないわけではないが、当該連鎖が(5)に対応して、「見る」の補文節に対応した出来事と解釈できる．

(5)　アイーダが驚き悲しむ（のを見たアムネリウスは・・・）

(4b) ではモノ（個体）として、(4c) のように、いくつかの指示語を用いることができ、明確にモノ（個体）であることを示すこともできるし、「それ」によってコト（出来事）としても解釈可能であることを示すこともできる．

(6)のような状況にあって、当該の XP-NP 連鎖がモノ（個体）としてのドアを表しているとは考えられない．モノであるなら、(7)のような場合、それ（ドア）を限定修飾する要素が付いてもいいはずであるが、不自然である．「閉まる大きなドア」なら問題ない．

(6)　レンコ、バス停に停まっていたバスに飛び乗る．閉まるドア．(＝(1a))
(7)　レンコ、バス停に停まっていたバスに飛び乗る．＃大きな閉まるドア．

D．XP-NP 連鎖は、対称的な NP-XP 連鎖と交換可能である．ここで注意が必要なのは、まずは「助詞」（通例、ガ格）を取らない場合を基本とするということである．(8)はシナリオ「お引っ越し」からの例．

(8) a．レンコ、バス停に停まっていたバスに飛び乗る．閉まるドア．（＝1a）
b．レンコ、バス停に停まっていたバスに飛び乗る．ドア閉まる．

その他の性質では、以下の議論と直接関係するものとして、次のような空間と、時間に関係する性質をあげておく．

E．XP-NP 連鎖が「空間的」、「時間的」意味を表す．(9)，(10)は黒澤明の映画「黒ひげ」撮影ドキュメント的解説文から．

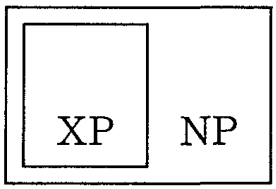
(9) （おとよは）木サジで薬を口元に運ぶ保本の手をパッと撥ねのける．むっとする保本．そこへ赤ひげが来て交替する．
(10) それから二年、ほおずき市の夜の賑わいの中で、背に赤ん坊を背負ったおなかを佐八は見つける．立ちすくむ佐八、その時、背後の風鈴がいっせいに鳴り出す．

F．以下のような実況放送などに見られる例は、ここで取り上げる XP-NP 連鎖のひとつの現れと考える．
これは、モノ（個体）としての解釈が〈統合〉の側面を持つとすれば、対極として、〈分離〉の側面を表す、と考えられる．これは、右方転位文と見なしえるかもしれない．いずれにせよ、ある種の文末主語文としての側面を持つ．

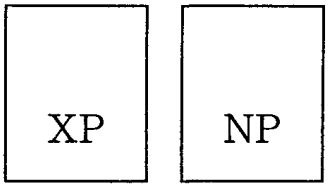
(11) a．突っ張る、突っ張る、貴乃花（！）．
b．ぐんぐん走る、走る、高橋選手（！）．

G．モノ（個体）とコト（出来事）としての 2 面性をもつ XP-NP 連鎖は、NP を主要部とした、通常の連体修飾構造とは違っている．XP-NP 連鎖は、〈統合〉と〈分離〉の 2 面性を持ち、それは〈統合〉の側面を持つ、NP を主要部とする連体修飾構造名詞句の認知図式（12a）と〈分離〉の側面を持つ、文末主語文（右方転位文）の認知図式（12b）の 2 つの性質を合わせ持つ、(13)のような認知図式によって表される．(13)の図式の語順の対称性についてはDで述べたとおりである．

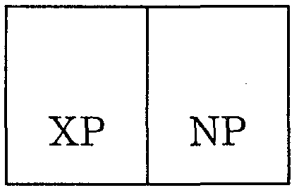
(12)　a.



b.



(13)



こういった図式に対して、(13)は（12a）と（12b）の中間の性質であると考えることもできる（構造の形式として、中間に位置付ける可能性である．(13)の図式は Cf. Foley and Van Valin (1982), Hopper and Traugott (1993) に類似しているが、以下で見るようにその成立根拠は異なる）．ここでの立場は、(12), (13)の違いを「すでに出来上がった区別」としてではなく、「区別が発生する」メカニズムを(13)の図式に内在する〈統合〉と〈分離〉の潜在性のあらわれと考える．以下の議論は、(13)の XP-NP 連鎖の図式の存立構造を明かにすることである．

H．知覚構文、存在構文には複数の構造的可能性が指摘されている（Cinque (1995), Declerck (1982), Felser (1999), Williams (1984) など）．それに平行して、XP-NP 連鎖は、知覚構文、存在構文に用いられる形式（英語では NP-XP 連鎖が普通）と平行して、構造的には、複数の構造として捉えられる可能性がある（cf. 坪本 (1992, 1995, 2001, 2002a), Tsubomoto (2000)）．

(14)　a．There was [$_{SC}$ a pig roasted]. (cf, Stowell 1981, Koopman and Sportiche (1988) Contreras 1991)

b．There was [$_{NP}$ a pig roasted]. (cf. Jenkins 1975, Williams 1984)

c．There was [$_{NP}$ a pig] [$_{AP}$ roasted] (cf. Napoli 1989)

(15)　We saw　the moon rising over the mountain.

a．We saw [$_{S}$ [$_{NP}$ the moon] [$_{VP}$ rising over the mountain]].

(NP-XP＝小節 (small clause))

b. We saw [$_{NP}$ [$_{N'}$ the moon] [$_{S}$ rising over the mountain]].
(XP＝疑似修飾)

c. We [$_{VP}$ [$_{V}$ saw] [$_{NP}$ the moon] [$_{VP}$ rising over the mountain]]. (XP＝叙述的付加詞句) [Declerck (1982)]

整理すると次のようになる.

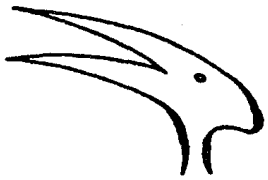
(16) a. [$_{SC}$ XP NP] (小節構造)
b. [$_{NP}$ XP NP] (疑似修飾構造)
c. [XP] (,) [NP] (分離(並列)構造)

ト書き連鎖の構造的可能性を(17)のように範疇αとして表すと、(16)の違いは、範疇αの違いで、それは、主要部をどう捉えるかの違いが反映したものと考えることができる.

(17) [$_{\alpha}$ XP NP] (日本語ト書き連鎖)
(α＝XP、NP) α＝NP → NP 中心
α＝XP → XP 中心

認知言語学の観点から見ると、以上のような知覚構文(および there 構文)に対して多義的な構造が提案されるのは、範疇αの揺れとして捉えることができる. XP-NP 連鎖の範疇αのゆれは、知覚に伴うゲシュタルト現象と考えるのである. すなわち、このような、ト書き連鎖(18)の範疇αのゆれは、《〈図〉と〈地〉の反転図形》(ルービンの盃)に見られるようにどの要素を〈図化〉(前景化)(逆に、どの要素を〈地化〉(背景化))するかの違いと考えるということである. すなわち、αを NP 中心と見るか、XP 中心と見るかによる違いである. ト書き連鎖のモノとコトの「両義性」とは、このような構造に関する〈図地分化〉に見られるゲシュタルト現象の反映であり、ト書き連鎖は、この2つの性質が〈融合〉あるいは〈共生〉したものと考える.

図地分化にあって、例えば、NP が図であり、同時に地であることはない. したがって、構造的には、コンテクスト等によっていずれかに区別することは可能である. このような複合体としての XP-NP 連鎖は、いわゆる、ウサギアヒルの図に見立てられる. われわれは、ウサギかアヒルとして見るのであるが、この絵そのものはその二つを含む絵であることに変わりがない.



I．ト書き連鎖(19)の両義性であるモノ志向の側面とコト志向の側面を下のような二つの機能として整理できる（cf. 坪本（1995, 2001））.

(18)　店の中をうろついているやくざ.

a．NP に注目せよ（やくざ（NP）に注意（注目）せよ）
b．NP を中心とした事態を描写、説明する（店の中をやくざ（NP）がうろついている（こと））

この性質は XP-NP 連鎖のもつ〈現場性〉の反映である。

J．XP-NP 連鎖は、英語では、前置修飾と後置修飾の違いとして論じられる〈自己対比〉（self-contrast）の性質を持つ.

(19)　a．A man unhappy is seldom in control of his emotions.
　　b．A man unhappy is just the sort of situation that I don't like.（cf. A happy man ….）[Bolinger (1965)]

(20)　a．激しかった雨がやんだ.［坪本 1992, 1995］
　　b．静かな雨が好きだ.

(20a) と (20b) の違いは、(20b) が「雨」のタイプについての述べていて、したがって「激しい雨」は嫌いだ、と言っていのである．それに対して、(20a) は「同じ雨」の「異なる」状態（すなわち、変化の中の一極面）を言っているという違いがある．決して、たとえば、「静かな雨」と比較して言っているわけではない．この違いは、ボリンジャーが(19)で言っていることと軌を一にする．後置修飾は、(19a) のようにモノ（個体）として解釈される場合と、(19b) のようにコト（出来事、事態）として解釈される場合の両義性がある点で、XP-NP 連鎖と共通している.

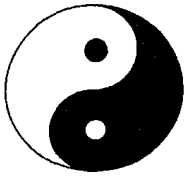
以上のような性質を押さえておいた上で、以下、〈対称性〉の観点から XP-

NP 連鎖の－特に、⒅の 2 つの機能的側面として反映する⒀の認知図式の－存立構造を考えてみたい．以上の性質は、XP-NP 連鎖が人間を含めた個物の〈存在〉、特に、〈時間〉および〈場所〉の問題と密接に関係する．（関連する議論として坪本（2000，2002）．ここでは紙幅の関係から、問題点をしぼったものにならざるをえない．Part 2 参照）

2．対称性の原理

ここで〈対称性〉とは、非対称性の論理が分離、区別を重視するのに対して、異質の領域のあいだに通路をみいだし、別々に考えられてきた領域のあいだに全体としての同質性を主張することである．異質のレベルの間に同質性を、あるいは逆に同質性のなかに異質性を考えるという一見矛盾した見方は、最近の複雑性の科学や「生の哲学」（たとえば、ドゥルーズ、さらに西田幾多郎も含めることができる．Cf. 檜垣（2005）、さらに認知人類学（中沢（2004））など）に見られる．「二項対立」による現実の捉え方は、間違いというのでなく、現実にはそうした考え方だけでは捉えられない現象がある、ということである．機械／人間、西洋／非西洋といった対立も単純には維持できなくなっているし、コンピュータと人間も使う側と道具といったものでなく、最近ではそれらが一体となったシステムが構成されている．複雑系科学においては、観察するという行為が、観察される対象系から分離できないことが論じられ、生命のような複雑な現象は、その内部から世界を見ているような観測者の視点が組み込まれる（吉岡（1997））．「量子論」においては、「量子」が古典物理学では矛盾的概念である、「粒子」と「波」のふたつの側面をもっていることが明かになっている．ただし、これらの性質が同時に観察されるわけではなく、観察されるときには「粒子」として観察される．しかし現象として、この二つの側面をもつことが明かになっている．ニールス・ボーアは「粒子」としての性質と「波」としての性質のように相容れないはずのふたつの事物が相互に補い合ってひとつの事物や世界を形成している性質（これを相補性という）を次のような古代中国の「陰陽思想」を象徴する大極図を用いて表した．

(21)



太極図

このようなことが成り立つのは、微視的な世界だけにかぎらない．が、後でみるように、XP-NP 現象は、変化の中のひとつの位相という意味で、微視的な側面をもっているとも言える．

〈対称性〉と〈非対称性〉を言語の場合で考えてみると、〈非対称性〉の見方として、アリストテレスの論理学があり、それは個体中心であり、文の形式として主語を中心とした「主語＋述語」を基体とするものである．文法的関係としての「主語」は「述語（部）」と対立するものと考えられるのが普通である．〈対称性の論理〉にあっては、「主語」と「述語」の間に同質性を認め、対立したものと見ない．「主語」と「述語」という区別も出来上がった区別ではなく、そうした区別を発生させるメカニズムを考えるとき、出発点として〈対称性の原理〉が有用であると考えるのである．いわゆる〈主客未分〉は〈主客合一〉でもある．こうした考え方に立つということは、アリストテレス論理学の〈主語論理〉ではなく、〈述語〉を中心とした捉え方が重要になってくる．さらに〈対称性〉の考え方では、言語を構成する無意識の働き（身体化）を重視する点で第二世代の認知科学（Lakoff and Johnson (1999)）とも共通する．

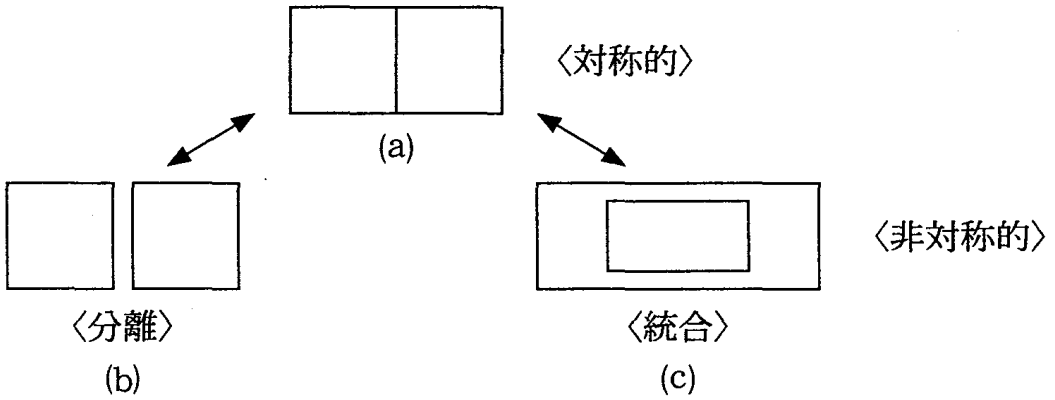
3．XP-NP 連鎖の存立（機能）構造

ところで、本論で取り上げる XP-NP 連鎖に対して、こうした例は、「一語文」として、連体修飾句として論じられることがある（例えば、最近のアフォーダンス理論による本多（2005））．また、一語文を出来事を基本的意味とする議論もある（尾上（1977））．本論の精神との共通性もあるが、私の立場は(1)のような連鎖がモノ（個体）とコト（出来事）の〈両義性〉を〈存在〉と〈知覚〉さらに〈身体〉の問題と結びつけて論じるところにある．「一語文」説は、それを出来上がった連鎖とみなしているのに対して、ここではその構造的分節化・

形態化の源泉としての存立構造を XP-NP 連鎖に見ようとするものである．〈対称性の原理〉によれば、〈主語〉と〈述語〉の間にさえ、同質性が見てとられる．非対称性は、認識の働きによる対称性からの逸脱である．あるいは別の言い方をすると、対称性には非対称性へと向かう〈潜在性〉があるといってもよい．以下の議論において、そこに(1)のような例の〈存立構造〉の本質があることを主張することになるであろう．対称性と潜在する非対称性との関係を(22)のようにあらわす．

(22)は XP-NP 連鎖が〈分離〉と〈統合〉の二つの方向をもつことを示している（cf. 坪本（2000, 2001, 2002, 2003など）．

(22)



(a)は〈並列〉あるいは〈連結〉を基本としたもので、隣接した要素どうしの間の関係であるのでメトニミー（換喩）的意識が反映したものと考えられる．(b)は周辺（修飾語）と中心（主要部）の関係を連体修飾構造に類似したものと捉えていると考えるとメタファー（隠喩）的な意識が反映したものと考えられる．

以下の問題は、XP-NP 連鎖自体の〈対称的な〉分節化とそこから〈非対称的〉に構造的分節化・形態的分化していく源泉としての出自であり、そのメカニズムを明かにすることである．XP-NP 連鎖の存立構造とはまさにそのことに他ならない．(22)で両方向の矢印が用いられているが、言語現象は、どちらか一方向だけで働いているのではなく、この〈対称的な〉側面と〈非対称的な〉側面の 2 つの側面が一緒になって働いているアンビバレントな関係にあると考えるからである．〈対称性〉とは、丸山（1983）のいう〈身分け〉構造と〈言分け〉構造の区別における、前者、つまり〈身分け〉構造を反映した分節化と考えられるものであり、身の出現とともに〈地〉と〈図〉の意味的分化を呈する世界と言ってよい．この分節化の構造は、身体の志向性の働きによって構成

されたもので、動物一般の生の機能による目的連関のもとで、たとえば、有害／無害、有用／無用といったゲシュタルト的に意味づけられた分節化である．また〈身分け〉構造は、〈身体〉という絶対的中心を原点とした座標軸によって、周囲の事物は上－下、前－後、遠－近といった運動能力に基づいて位置づけられる．他方、〈言分け〉構造とは、シンボル化能力による世界の分節構造である．〈言分け〉構造は〈身分け〉構造を土台にして、各言語の構造と機能（例えば、語順など）に応じて再分析されることによって成立する（以上の説明は、野家（2005）の説明を参考にしている）．こうした意味において、〈言分け〉構造としては「一語文」と言ってもよいのであるが、その前提としての〈身分け〉構造を考えると、XP-NP 連鎖を単純に「一語文」あるいは「連体修飾構造」というわけにはいかない（「一語文」説は〈統合〉の方向に限定した見方である）．

4．「語り」という原初的言語行為

第１節の例でもわかるように、XP-NP（あるいは NP-XP）連鎖はシナリオのト書きや新聞キャプション、ドラマのドキュメント解説など、特定の文体にどうして用いられるのか、それはこの構文連鎖の存立構造を考える上で重要な問題だと考える．本節では、この問題を考えてみよう．

筆者の議論は、木村敏（一連の著作集）や最近の木村（2005）、さらに中沢（2004）から啓発されたものである（木村の議論は、西田哲学に通じるところがある）．それは、ひとくちに言って、〈行為の立場〉であり、〈あいだ〉の関係を重視する立場に立つものである．これを〈時間〉の問題と関係づけて述べてみよう．われわれは線の上の点として「過去・現在・未来」というように、時間を対象化するという形で捉える傾向がある．こうした経験は、物理や数学の問題を解いたときのことを思い出せばよい．すなわち、均質化された座標空間としての時間である．こうした時間を木村はリアルな時間とよび、時間は一本の流れによって表象され、時間は一様な早さで一方向に進んでいる．こうした時間にあっては、現在という時点を捕まえられない（なぜなら、今捕まえたと思った現在は、すぐに過去となるからである）．他方、木村がアクチュアルな時間とよぶのは、生きて行為するわたしが世界と接触する時間であり、そこでは「いま」の時間と「わたし」という行為主体とが完全にひとつのものとなっ

ている．例えば、われわれが何かに夢中になって取り組んでいるような場合の時間．それは時間に浸された内側から視る立場に立ってこそ理解されるのである（具体的な例は、5節で取り上げる）．〈行為の立場〉とは、状況を外からでなく、時間の内側に立って、状況とともに言語主体も〈動く〉ということである．行為的な立場という点では、アフォーダンス理論とも共通するところがある．それは、木村の議論の根底には西田幾多郎があり（彼の哲学こそ、主観と客観の対立を超えたところから出発している）、西田の〈純粋経験〉の考え方とジェームスのそれやベルグソンの〈純粋持続〉との関連性はつとに指摘されるところであり（もちろん同じというものではない）、ギブソンのアフォーダンス理論もジェームスとの接点があるからである．本論の立場を〈対称性言語学〉と呼称するとすれば、このアプローチはアフォーダンス理論の基本的な考え方とも矛盾するものではないと考える．

ところで尾上（1999）では、(23)のような例（特に、大阪弁でよく用いられる）のような「助詞なし」の連鎖のひとつの用法は「存在の質問文」であり、〈存在〉との関連性を指摘されている（昭和63年にすでに報告されている由である）．本論の XP-NP 連鎖に対応する NP-XP 連鎖は「助詞なし」連鎖であり、共に知覚と存在と密接に関係することは上述の通りである．

(23) 仕入れ、ないか．

本論の立場からいえば、「助詞なし」の連鎖（NP-XP）は、(1)にあげたような場合の対称形式であり、XP-NP 連鎖との関連でその本質がより強く表れるということである．というのも、こうした用法は、基本的に「語り」の文体であり、「語り」はわれわれの経験を整序し、他者に伝達する最も原初的な言語行為として位置づけられ、作者と読者（聴者）が形作る共同の「場」あるいは「コンテクスト」を基盤としているからである（野家（2005: 51, 64）．メルロ＝ポンティは、哲学者は意味が湧出する始源的な現場にこそ立ちあわなければならないとし、通常のことばが流通する場面の手前に身を置くべきだとして、「詩」のことばをあげている．意味が分泌されることは詩人の仕事であると考えたからである．詩のことばは瞬間をとどめ、現在を永遠のものとして語りだすことができる（熊野（2005））．

こうしたことから考えて、「助詞なし」の連鎖(23)にも、ここで取り上げている「語り」としての用法の中にみる原初的な存立構造が隠れていると考えるこ

とができるのではないか．例えば、㉔の例はラジオドラマ・シナリオからのもので（擬似）実況放送のアナウンサーの発話である．これは「係り結び」に通じる用法である．㉓の語順を転倒させてみよ．

㉔　折しも、高らかに起こりましたバンドの演奏……．いかにして身を支えておりますか八人の楽員．（西沢実「タイタニックの悲劇」）

野家（2005）の議論にそって「語り」の問題をもう少し考えてみよう．「物語」がすでに完結した全体という実体論的概念であるのに対して、「物語る」という言語行為としての「語り」の特徴は、その発生を「口承言語」にもとめ、作者と読者（聴者）とが形作る共同の「場」あるいは「コンテクスト」に求められると考えられる．「語る」と「話す」とはどう違うのか．「話す」は話手と聞き手の役割が自在に交替可能な「双方向的」な言語行為であるのに対して、「語る」は語り手と聴き手の役割はある程度固定的で「単方向的」な言語行為といえる（「話しが合わない」というのはあっても、「語りが合わない」というのはない）．「話す」はそのときどきの場面に拘束される「状況依存的」であるが、「語る」は「状況独立的」であり、「構造的」な言語行為である．すなわち、「話し」の自由性に対して、「語り」はそれだけ形式性に富んでいる、ということである．「話し」はどこに落ち着くのか成りゆきまかせなのに対して、「語る」という行為はあらかじめその行き先は語りの構造と仕掛けによって定められている．「語る」は、「話す」よりも意識的で、ひとレベル上の言語行為である．

確かに「語り」の文体には、語り手中心の側面が色こく反映している．例えば、「無標」の語順（S＋V）に対する「有標」の語順（V＋S）は語り手中心の語順であると言われる（Gundel et al.（1988））．「語り」の文体には、「有標」の語順なり、特有の言語形式（ト書き連鎖もそのひとつ）が用いられやすい（これは、日英語に共通である）．それは、語り手（書き手）の「操作的」（表現）側面が反映しているといってもよい（例えば、どのような出来事をどのような配列で表現するか、といったようなこと）．こうした〈テクスト〉空間の構造に対して、それぞれの言語の構造的特徴に則して分節化するという〈言分け〉構造が関与するわけであるが、その基礎に〈身分け〉空間の分節化があることを忘れてはならない．本論の立場は、こうした言語空間の分節化を〈対称性〉と〈非対称性〉という観点から見ることである．これを時間の問題からさらに考えてみよう．

5.「語り」の文体の構図：一人称的時間と複数一人称的時間から

時間には、もちろん時計の時間がある．これは公共的に表象される時間であり、正確に計測可能な物理的時間である．一方、時間には体験している「私」にだけ属している、ミンコフスキーが「生きられる時間」と呼ぶ時間様相がある．これは現在に密着したものであって、そこに過去や未来との連続の意味は含まれていない．ここでの時間の変化という時間感覚は、客観的な時間のように時計で計測できるものではなく、「主観的性格」をもった、行動の場面と密着した－〈いま、ここ〉に現前している－「時間感覚」である．客観的な時間は公共的な意味で「三人称的」であり、行為の場面と密着した「生きられる時間」は「私」に属するものであり、「一人称的時間」と呼ぶことができる（木村(2000, 2005など）で参照)．この「私的」な時間様相は、相互二人称ないし複数一人称の関係にある相手にだけは、共有することができる．

「語り」は登場人物の一人称的な経験（以下では、時間の変化に伴なる自己感覚）を読み手を巻き込んで複数一人称の関係として共有する文体であると言える．われわれはこうした語り手の工夫によって、外から客観的に出来事を見る（読む／聞く）だけでなく、その出来事の中に入って登場人物の心理的な側面を共有することができるわけである．具体的にまず、英語で考えてみよう．

(25) a. There, lying on the black velvet lining, was the Delhi Suite. (Chen 2000: 236)

b. He (=Columbo) pulled the drawer out somewhat further. There in the very back filling the space between the pencils and the back wall of the drawer was a very slender stationery box. (*Columbo, The Dean's Death*)

(25a) は、宝石（the Delhi Suite）を手に入れようとしている主人公がやっとその宝石を見つける場面である．下線部の描写は、主人公の目を通して行われているが、まず、大まかな場所（there）を手がかりに、さらに存在の様態とともに、その場所がさらに絞られて（the velvet lining)、段階的に問題の宝石へと注意を向けるというクローズアップである．前景（図）要素（宝石）に至る間に長い表現が介入しているが、その間の主人公の視線の動きに即応し、読み手に時間の進行を感じさせる．(28b) の引用部分の前にコロンボの思惑に

もかかわらず引き出しの中に証拠品が見つからないという場面があり、コロンボの捜査の視線がさらに引き出しの奥の空間を移動し、そこに何か（stationery box）を見つけたのである．ここでも、文頭（背景）から文末要素（前景）までのコロンボの視線の動きに応じて読み手もそれに同化し、時間が変化しているように感じさせる効果があるわけである．なかなか事件の物証がみつからない、というコロンボの心理的な状態と時間進行の感覚とが共鳴しているとも言える．サスペンスというのは、出来事を外側から対象的に見ているだけでは、得られないものである．われわれはこうした語り手の工夫によって、外から客観的に出来事を見るというだけでなく、その出来事の中に入って登場人物とともに「いま」の生き生きとした時間感覚を体験し、時間様相だけでなくその心理的な側面を共有することができるわけである（書き手（言語主体）の捉え方を共有していることでもある）．

さらに、「語り」の when 節との関係で、次のような suddenly の用法がよく取り上げられる（「語り」の when 節の詳細な用法については坪本　(1998) 参照）．

(26) In the darkness, John felt his way up the stairway of the dilapidated old house. Halfway up, there was a loud cracking noise under his feet, and <u>suddenly</u> he was falling through space.

(26)のような例の suddenly の用法（サスペンスや意外性を反映するといわれる）は主に情報構造から論じられることが多いが、ここでの観点からいうと、単に状況の変化が突然であったというような外側からの描写という側面だけでなく、ジョンにとって突然であり、意外である、という物語の時間進行の内側からの捉え方が反映しているということになる．日本語でいえば、「暗闇の中でジョンは老朽化した家の階段を手探りで上っていた．半ばまできたとき、足許でバリバリと大きな破れるような音がした．と突然、自分が空中を落ちていた」といったような意味合いで理解するのが〈複数一人称的〉な捉え方である．「語り」の持つこうした特徴は、XP-NP 連鎖を用いたテクスト空間の構図にも見られると考えられる．

次のような例は、小説の中からの実例である（第１節でも取り上げた）．

(27) だれかの叫ぶ声に、振りむくと、鷲尾邸の方 角から、エンジンの響きも高く近づいてくる一艘の小舟.（江戸川乱歩「黄金仮面」）

ちなみに、(27)は江戸川乱歩「黄金仮面」からのものであるが、彼のいくつかの作品には講談調の時代がかった表現スタイルが感じられるが、この場合もそうである．特に、少年ものといわれる分野（少年探偵団や怪人二十面相のシリーズ）でその傾向は強い．ここでも、柳田國男の口承伝統における「物語る」ことの音声言語と文字言語の二項対立に収まらない第三のカテゴリーとしての特質がみてとれる（野家（2005: 30）．XP-NP 連鎖とは、こうした「語り」の文体のもつ、作者と読者（聴者）とが形作る共同のコンテクスト（場）の重要性を背景にして成立している、と考えられる．次節で再度この例は取り上げる．

次のような例は、「語り」ではないが、実況放送などに典型的に見られる文体（表現形式）である．ここでアナウンサーは、先行する XP 部の行為主体は三人称であるが、その動きと同化して一体化し、一人称複数化していると言ってよい．それを見たり、聞いたりする人間もその一人称複数のなかに組み込まれる．その証拠に、われわれは、ひいきの相撲取りやタイトルマッチの日本人ボクサーとともに、身体に力がはいり、身体をねじらせるのである．

(28) a．突っ張る、突っ張る、貴乃花！
b．回る、回る、パンチをよけながらコーナーを回る、山本キッド！
c．・・・客引きがわめくように口上を述べました.「ささ出ました.珍しい玉乗り．ただの玉乗りとはわけが違う・・・」
（佐々木味津三「南蛮幽霊」）

あるいは、子供がはじめて歩き始めたとき、次のような言葉が親から出ることは自然である．

(29) 歩いてる、歩いてる！ハルチャン！歩いてるよ．

このような場合も、親は子供の動きと同化し、一体化している．したがって、動作の主体は三人称であるが、一人称にしか感じられないはずの知覚に伴う主観的な実感（この場合は、歩くこと）を一人称複数として共有していると考えられる．これが XP-NP 連鎖の XP の根底にあると考えるわけである．ということは、〈対称性〉から「一人称複数」として NP（三人称の場合でも）の行

為の場面の時間と空間を共有しているといった効果をもつわけであり、ここに「語り」の文体の原初性が反映しているということである.

〈対称性の原理〉によって、XP と NP の同質性をもつ XP-NP 連鎖は、非対称性の原理によってその〈分離〉の潜在性を構造的に明示したのが次のような例である.

(30) 遠くから自転車でやって来たらしい四、五人の中学生が土堤の斜面で遊んでいる. その中の一人、色の白い顔だちの良い少年が土堤の上に目をとめる. 土堤の上に荒い息をつきながら立っているのは千代である. (シナリオ「男はつらいよ・夢枕」)

(30)は(31)のように、ト書きのような特定のコンテクストにあっては、XP-NP 連鎖にしても不自然ではない. (ただし、シナリオのト書きには、いくつかのスタイルがあり、ト書きの中に、〈対称的な〉形式と〈非対称的な〉形式とが混在していることが多い. あくまで、ここではト書き特有のスタイルを言っているのである. 他のスタイルについては、坪本 (2000, 2001) 参照)

(31) その中の一人、色の白い顔だちの良い少年が土堤の上に目をとめる. 土堤の上に荒い息をつきながら立っている千代.

実際、XP-NP 連鎖には、分裂文タイプの形式にしてもよいような場合がある. (32)が実例で、(33)は作例である.

(32) だれかの叫ぶ声に、振りむくと、鷲尾邸の方 角から、エンジンの響きも高く近づいてくる一艘の小舟. (=(27))

(33) だれかの叫ぶ声に、振りむくと、鷲尾邸の方 角から、エンジンの響きも高く近づいてくるのは一艘の小舟 (であった).

違いは、ここでも、「語り」の文体に伴った臨場感、現場性、といったわれわれの外界や内界の対象を知覚あるいは表象したときの、主観的実感 (クオリア、第 6 節参照) を登場人物とともに共有しているような効果があるかどうかの違いである (これこそが、「語り」を原初的な言語行為とするものである). 分裂文にすれば、アフォーダンス理論であれば、探索活動と呼ぶであろう過程とその結果としての不変項が〈分離〉した、〈非対称性〉の構成が優位の客観的な構図になっているのに対して、XP-NP 連鎖は、〈対称性〉の構図を維持

している構図になっていて、それだけ原初的な主観的表現形式ということになる.

ここでの意図は、〈対称性〉を反映した連鎖も、つねに〈分離〉と〈統合〉の潜在性をもち、「語り」の文体と考えられるような特定のコンテクストを離れれば、表現形式（したがって、構造）としても〈非対称性〉に即したものになりやすい、ということである. XP-NP 連鎖が〈非対称的〉に〈分離〉のベクトルで表現される場合、ひとつは、NP を主語（題）とした「主語＋述語」の形式であり、さらにここで取り上げた「分裂文」タイプのような「判断文」である.〈統合〉のベクトルとしては、連体修飾構文（いわゆる一語文）を典型とする.

英語は日本語に対して、〈非対称的〉な表現形式が優位な言語ということができる. が、英語にあってもト書きでは NP-XP 連鎖が用いられるという点で、日本語と共通している. それ以外の場合では、〈非対称的〉な形式としては「主語＋述語」の形式、例えば、分裂文タイプが用いられる.

6. XP-NP 連鎖の出自

XP-NP 連鎖の出自として、ここでは 2 つの視点から考えてみよう. ひとつは、格の関係から考えることであり、もうひとつは〈自覚〉つまり〈自己意識〉から考えることである.

6.1.「助詞なし」連鎖と知覚・存在との関係から

格の観点から考える上で、まず、山口（1989）がある. 山口は古代語の表現における主語の問題を次のような例をあげて、格の関係から論じている.

(34) 昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里に知るよしして、狩りに住にけり. その里に、いと、なまめいたる女はらから住みけり.（後略）

ここで「男、初冠して、・・・狩りに住にけり」、「女はらから　住みにけり」は、現代語では主語と述語の関係で捉えられるものである. しかし、現代語であればどういう関係で他の語に続くのかを示す助詞が用いられていないで、名詞だけが用いられている. つまり、現代語のように「が」や「は」を用いて捉えた関係で考えるべきではなく、情景を見て、そこで目にした「男」「女はら

から」を意識し、それからそのものの動きやあり方を意識するというように、意識にのぼった順番に述べているだけであると述べている．つまり、話手が観察者として場面を述べる場合、観察したままに話しの世界を形成したものだということである（これを日本語の特徴としている）．

XP と NP はアフォーダンス理論における〈不変項〉のふたつの場合に対応していると考えられる．「不変項」とは私たちは光の構造に包囲されているとし（これを「包囲光」という）、観察者の移動や環境の変化に応じてその構造が「不変なもの」をいい、「構造不変項」と「変形不変項」の 2 種類があるとされる（変化の中に不変を知覚する）．「構造不変項」とは「同一性の知覚」、すなわち、対象の恒常的に保たれている性質を知覚することを可能にしている不変項であり、「変形不変項」とは、いま生じている変化がどのような変化なのかを特定する不変項である（佐々木（1994:51）．佐々木の例をあげれば、暗闇に動くものがゴキブリかどうか特定するのが構造不変項、それが人間に気づいて「逃げている」のか、気づかずのんびり「歩いている」のかと特定するのが変形不変項である．このような見方に則して考えると、XP は「変形不変項」に、NP は「構造不変項」に相当する．したがって、XP-NP 連鎖は、観察したままに、不変項が 2 つ並列されたものということになる．山口（1989）で古典語の例で取り上げられている「助詞なし」連鎖は、現代語においては「語り」の文体に典型的に見られる〈存在〉の連鎖である、NP-XP（XP-NP）連鎖としてその原初性がつながっている．ただ、山口（1989）がいう意識にどちらが先にくるか、ということをさらに考える必要がある．

そこで次のようなコンテクストで考えてみよう．NP と XP の語順であるが、(35)に見られるように、「動き」のコンテクストの中で影響が大きいと考えられる．

(35)　水かさの増したタケマ河、アルセーニエフ一行六人が筏を作って<u>漕ぎ出す</u>．<u>急流を必死で漕ぐ</u>　<u>隊員たち</u>、<u>やっと岸に近づく</u>．

「漕ぎ出す」→「必死で漕ぐ」という行為の連鎖が XP を先行させるのにふさわしく、XP-NP 連鎖にすることによって出来事の〈動き〉をより動的に捉えることができるわけである．こうしたコンテクストにおける違いがあるが、[XP-NP] と [NP-XP] の間には語順の対称性がある．

〈一語文〉あるいは〈連体修飾名詞句〉の立場では、XP は NP を主要部

（中心）とした〈周辺〉となるが、NP と XP は相互に〈中心〉でもあり、〈周辺〉でもある、という〈対称性〉を示す．後で取り上げるが、こうした例からも分かるように、〈対称性〉は動的に捉えられるべきものであり、たとえば、(35)にあっては、「漕ぎ出す」との継起性においては「急流を必死で漕ぐ」が〈中心〉で「隊員」（NP）が〈周辺〉といってよいが、後続の「やっと岸に近づく」（XP）との関係では、「隊員」（NP）は意識の〈中心〉になっている．後でみるように、XP-NP 連鎖は、本来、こうした連続体のなかで捉えられるべきものである．

〈対称性〉を示す XP-NP 連鎖がそれでは「一語文」あるいは「連体修飾構造」とみなされるのは、〈非対称性〉の原理によって、〈言分け〉構造として、日本語という言語の構造に即して再分析され、結果として〈統合〉の図式にあった分節化がされるからである．この傾向は、ギボン（Givon, T）やボリンジャー（Bolinger, D）が論じているように非計画的な（unplanned）な連鎖から計画的な（planned）な連鎖、すなわち、構造的に固まっていない連鎖から構造的に固まっている連鎖（談話的なものから統語的な連鎖）への変化と一致する（詳細は、坪本（1998, 2001, 2002など））．

(36) It's nice, sitting around and talking.
(37) It's nice sitting around and talking. [Bolinger (1977)]

(36)は後から思い付いた it の特定化といってよく（場面依存で無計画な談話的用法）、(37) は文法的に定められ、構造として固定化している（Bolinger (1977)）．

「一語文」といわれる連鎖で重要なことは、〈対称性〉と〈非対称性〉は何れかだけでなく、一緒になって働いているという〈対称性の原理〉を見失うべきではない、ということである．

6.2. 〈自己意識〉と〈場所〉としての〈自己〉の観点から

XP-NP 連鎖の出自としてふたつ目の見方は、対称的な関係にあるとする NP と XP の〈同一性〉あるいは〈同質性〉をどう捉えるか、ということがある．ここで〈自己意識〉あるいは〈自覚〉および〈場所〉の問題が重要な役割を果たす．〈場所〉とは主体がいる場所である．この場所の問題を考える上で、〈俯瞰図〉（あるいは〈側面図〉）と〈正面図〉の違いが関係する．

俯瞰図あるいは側面図は状況を眺める視点を出来事の外部におく場合であり（これは、ちょうど、額縁に入った絵画に見られるように、その場面を描く視線は私の眼差しの外部に仮設されている）．他方、正面図の中の事物は、私の眼を結ぶ線上に、まさに「今ここ」にいる私のなかにある．すなわち、情況に内属するものの視点である．正面図では、マッハの自画像に見られるように、主体は自画像の中心に姿を現さない．つまり、「首なし」の自画像である（cf. 野家（2005: 131）．「首なし」の自画像とは、自分の視野の中に見える視覚風景そのもの、ということができる．身体の動きに応じて部屋の見え姿は変化するのであるが、その見え姿に対応して主体自身が意識される．こうした見方は、〈対称性の原理〉の考え方と共振する．後続の節で取り上げるように、ここにおいて状況と主体とが一致している、という方向である．

Langacker（1990）の「主体化」とは、言語主体による主観的な状況把握（Langacker 1990）のことである．(38a) に対して (38b) のように、いわば、状況に埋没している場合のことである．

(38)　a．Vanessa is sitting across the table from me (Veronica).
　　b．Vanessa is sitting across the table.

これは、(38a) が状況を側面図（あるいは俯瞰図）として描写している場合であり、(38b) は正面図として私の眼を結ぶ線上に（私の眼を中心にして遠近法的に）見えたままの姿が描写されている場合である．このような場合、日本語は知覚主体を表現しない．日本語は英語に比べて、「主体化」の度合が強いと言われる（西村 2000，池上 2000，特に、森 1998，廣瀬 2002）．これは、つまり、「首なし」の自画像に対応する．すなわち、主体はその自画像の中心においてまったく姿を現さないからである．鏡に移った自分の姿は全身像であるが、それは虚像というべきである．

知覚に伴って、「私」には主観的な実感がある．アフォーダンス理論であれば、視覚は外部からの情報を得るだけでなく、同時に自身の動きについての感覚であり、「運動感覚」や「自己感覚」であるというであろう（佐々木1994）．木村敏は外界や内界の対象を知覚あるいは表象したとき、その行為に伴って「自己クオリティ」、すなわち「主観的な実感」が感じられるという行為的事実（アクチュアリティ）のことを「自己」とよぶ（第5節の時間の議論も参照）．こうした「自己」の感覚を「クオリア」つまり「経験の主観的クオリティ」と

いう．アフォーダンス理論であれば、こういう感覚をもつときの自己のことを「エコロジカル・セルフ」ということになるであろう（本多（2005））．

マッハは「首なし」の自画像を「自己観察による私」と名づけている．つまり、正面図から状況に内属した形で自分の視野の中で知覚される視覚風景は、そのことがそのままこととしてあらわになっているのであり、それが「私」（＝自己）ということである．とすれば、「首なし」の自画像（XP）すなわちNP（＝私）であるという〈対称性〉を示していることになる（XP＝NP）．ある種の「同格」的側面をもっているということである．

次の例で考えてみよう．XP-NP連鎖に「です（だ）」がついていて（「です」の問題は第5節も参照）、それだけ客観的な側面が生じるが、やはり話し言葉というよりも、「語り」の効果をねらった文体ということができる．

(39) スッキリしても、においが消えるまでこもっていた私です．（CM）

(40) ・・・古いＣＭで“モーレツからビューティフルへ”というのがあったが、私自身の内部で、今その方向にベクトルが動いているのを感じる．否定から肯定へ、内なる戦いが始まろうとしているエナジーを感じている四十三歳の私である．（朝日新聞）

〈非対称的〉な次のような言い方では、何ら特別な文体効果がなく、ただ事実だけを客観的にのべているような感じがする．

(41) 私はスッキリしても、においが消えるまでこもっていた．（自覚というより客観的事実を述べている感じ）

ここで、XPに相当するのは、「スッキリしても、においが消えるまでこもっていた」であり、「否定から肯定へ、内なる戦いが始まろうとしているエナジーを感じている」である．これは、第5節で述べた時間との関係から述べると、「私」にだけ属している、ミンコフスキーが「生きられる時間」と呼ぶ時間様相であり、現在に密着した、〈いま、ここ〉に現前している主観的な実感であり、時間感覚である．客観的で事後的な形で、いわば「三人称的」な時間的叙述ではなく（これは、(41)の場合に相当する）、体験の場面と密着した「一人称的」な時間感覚に裏打ちされた、主観的な実感であり、そのような実感こそ、「私」そのものということができる．これは、〈対称性〉そのものであり、XP＝NPの〈同質性〉によるXPとNPの一致が生じている．このような例

がコマーシャルや読者に共感を求める、ある種、形式化した文体として用いられるのは、読み手（聞き手）を一人称複数的にそうした経験の共有に誘導する文体と言える（はがきや投書の類いにもその末尾の文にこの種の文体をよく見かける）.

〈対称性〉の観点から見ると、次のような例も違った角度から接近できる.

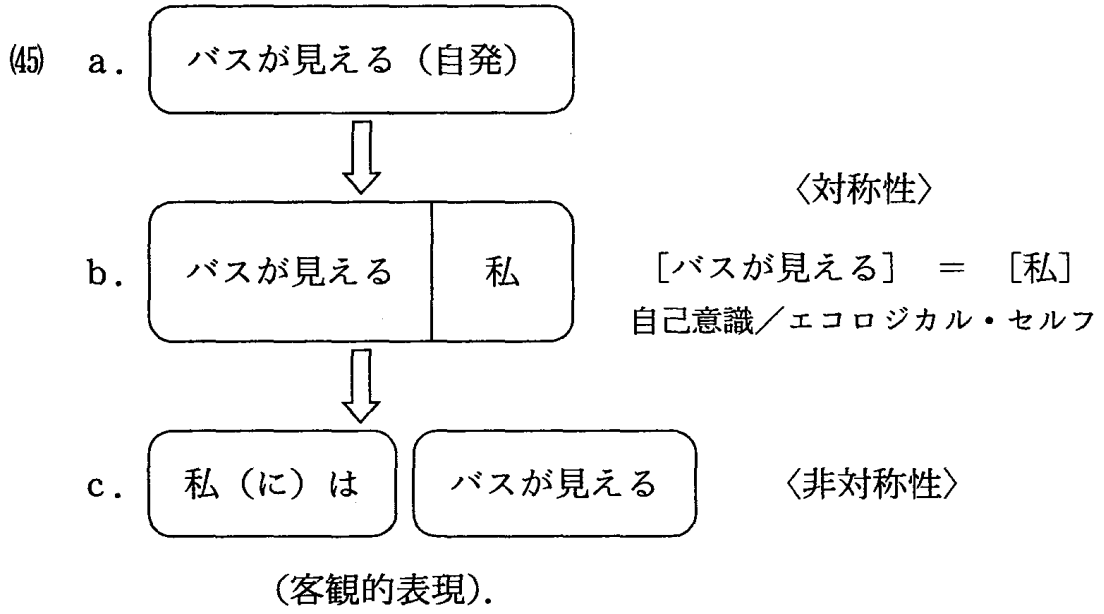
(42)　a．向こうにバスが見える.
　　b．I (can) see a bus over there.

西村（2000）では、Langacker の〈主観性〉との関係で「主語」の使用に関して日英語の違いを論じているのであるが、本論の立場では、日本語は英語に比べて〈対称性〉に則した表現形式をとる傾向がある、ということになる. 英語はより〈非対称〉に則して、〈分離〉（あるいは〈統合〉）の傾向が強いということになる.〈対称性〉に則して考えると、西村と違って、(a)を(43)と直接比較するのではなく、(44)のような形（XP-NP 連鎖）を考えることになる.（表現上、ていねい体を変更してある.）

(43)　私（に）は向こうにバスが見える.（対比用法）（西村 2000）
(44)　向こうにバスが見える私（cf. (7)).

つまり、(42a) は、マッハ流にいえば、「首なし」の自画像（自己）であり、アフォーダンス理論では本多（2005）のいう「エコロジカル・セルフ」であり、また木村においては「主観的な実感」が感じられる「自己」すなわち、西田哲学でいう自己意識としての（自覚）のことであり、(44)はそれが「私」であると表現されたものである. そうした「主観的に何かを実感している」時にわれわれはまぎれもなく他の誰でもない「自己」を感じているのであるが、それが「私」であると表現したものといえる[註1].

(42a) のような〈自発表現〉の主語（題）には〈場所性〉があるといわれるが（(43)の「～に」に見てとれる）、それは「主観的な実感」である「経験の主観的クオリティ」（クオリア）の生じる場所（意識野）が NP（私）であるからである. と同時に、XP は〈今〉という時点で私の意識野に映ずる状況の位相をあらわすという意味で〈時間的〉であり、(44)の XP-NP 連鎖は NP（私）の〈今〉、〈ここ〉の位相をより明示的にあらわす表現になっている.



したがって、第1節でXP-NP連鎖の特徴(E)として例(46), (47)のように、「場所（空間）」や「時間」の意味と連接しえるのは、XP-NP連鎖が「場所」「時間」の表現でもあるからである（再掲）.

(46) （おとよは）木サジで薬を口元に運ぶ保本の手をパッと撥ねのける. むっとする保本. そこへ赤ひげが来て交替する.

(47) それから二年、ほおずき市の夜の賑わいの中で、背に赤ん坊を背負ったおなかを佐八は見つける. 立ちすくむ佐八、その時、背後の風鈴がいっせいに鳴り出す.

XP-NP連鎖にあって、NPが文字どおり〈場所〉である表現も、「語り」の文体の一つである、実況放送でよく用いられる.

(48) a. （こちらは）多くの観衆が集まっている［甲子園球場］です.
b. ［こちら甲子園球場には］多くの観衆が集まっている.
c. こちらは、多くの観衆が甲子園球場に集まっている.

一見すると、「こちらは甲子園球場です」のような場合と同じく、「こちら」は、甲子園球場という建物、つまりモノ（建物）を指示しているように見える. この場合には、(48b)のような言い方と関係づけることができる. しかし、(48c)のような例と関係しえる解釈もありえる. この場合、「こちら」は単純に「建

物」としての「場所」ではなく、「甲子園球場」を含んで、出来事が生じている「場所」でもある．その「場所」とは言語主体のいる〈場所〉といってよい．主体（自己）のいる場所の拡張として甲子園球場も含めて〈場所〉ということになる．これは、自己の身体の拡張といえる（Langacker 1987: 195, メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』1967, 1974.）．実況放送での（48a）のような表現によって、視聴者にもアナウンサーの〈現場性〉という「主観的なクオリティ」（主観的実感）といったものが伝わってくる[註2]．

第5節で述べたように、「一人称的」な主観的な実感は、親密な関係にある相手あるいは第三者とも知覚に伴う主観的な実感を一人称複数的に共有することができる．実際、(1)のように、これまで取り上げた例でNPとして三人称名詞句が用いられている．こうした三人称が用いられる根底には、(45)のように一人称の用法を基本としていると考える．つまり、言語による分節化は「首なし」の〈身体〉（つまり、自己）の客体化に応じた分化・分節化を基盤としているということである．

ちなみに、先の(25)で "There, lying on the black velvet lining" や "There in the very back filling the space between the pencils and the back wall of the drawer" は、英語でも「首なし」つまり「主語なし」の分詞節であり、「正面図」としての側面が含まれる文体だということが分かる．

7．部分と全体

最後に簡単に、XP-NP連鎖の根底にある〈対称性〉を〈部分〉と〈全体〉の面から考えてみよう．西田（2004）は、(49)のような例をあげ、面白い議論を展開している．そこでの議論は、本論の〈対称性の原理〉からより包括的、一般的な観点から違った形で考えることができる．

(49) この作品は（晩年の鴎外／鴎外の晩年）を描いている．

では、「N1のＮ２」と「Ｎ２のＮ１」のように語順が入れ代わっても両方とも、可能である．しかし、(50)のように言い換えられる場合、(51)のようなコントラストがある、という（(51)は西田（2004）の判断）．

(50) 晩年、鴎外は将棋に凝っていた．

(51) （晩年の鴎外／*鴎外の晩年）は将棋に凝っていた．（西田 2004）

つまり、「晩年の鴎外」には、(a)人を指す読み、(b)時間領域を指す読みの両方があるが、「鴎外の晩年」は時間領域を指す読みしかない．固有名詞「鴎外」が人を指す場合には交代しない、としている．(51)のコンテクストは「鴎外」を人として指示する場合であるから、「鴎外の晩年」は人を指示しないので不整合であるということであるが、私自身を含め何人かのインフォーマントの判断から、(51)のコンテクストでも交替は可能であると言ってよさそうである．これはどう考えればいいかと言うと、「鴎外の晩年」も「人」を表わしえると考えればいいわけである．(52)のようにすれば一層、主要部としての鴎外の読みは明確になるであろう．

(52) 鴎外の晩年／晩年の鴎外は苦しかった．

その理屈は、１人の人間の人生（時間）と流動するそれぞれの時の局面（位相)、つまり〈全体〉と〈部分〉は〈対称性〉の関係にあるからである（[N1 の N2] と [N2 の N1] はまさに〈対称的〉である)．つまり、全体は部分であり、部分は全体である、というように、〈同質性〉の関係にあると考えるわけである．その事情はこうである．「若いころの鴎外」と「晩年の鴎外」は確かに「異質」である．しかし、そうした「異質」の要素の間に〈同質性〉を見いだすのが〈対称性の原理〉である．その〈同質性〉とは何か、といえば、それはどのような時点にあっても「鴎外」そのひとの人生であることに変わりはないからである．流動的な時の変化の局面を不変のものが媒介する．先に、英語の「後置修飾」との関係で、〈自己対比〉(self-contrast) のことを述べ、XP-NP 連鎖との共通性を論じた．（ちなみに、後位修飾は前位修飾と、コンテクスト次第で交替可能である．）つまり、「鴎外の晩年」といっても、それは鴎外という一人の人間の生涯の異なる位相を問題にしているのであって、西田 (2000) の(51)の判断は、それぞれの時点を〈分離〉し、「鴎外の晩年」と（例えば）「鴎外の若年時」とを別物として、比較、対照しているためである．つまり、〈非対称性〉の方向で論じているのである．〈自己対比〉の関係にある場合、まさにそれは同じ対象の異なる位相を問題にしているのであって、それぞれの位相の違いに関わらず、相互に〈同質〉（均質とは違う）として扱うことによって、全体としてひとつのまとまり、鴎外の例であれば、鴎外という１人の人間

あるいは、その生きた人生としての〈同一性〉として理解されるわけである．したがって、「鴎外の晩年」は主要部の「両義性」を示すことになる．つまり、「晩年」と「鴎外」どちらでもありえる（cf. (17)の α の解釈を参照）．

「N1 の N2」についても XP-NP 連鎖を身体との関係で述べてきたことが言えるわけである．それは、頭や腕と身体の関係と同じで、いわゆる、〈分離不可能所有〉の関係にある．〈分離不可能所有〉の場合にも同様の〈対称性〉があり、〈全体〉と〈部分〉、あるいは〈中心〉と〈周辺〉の〈同質性〉である．英語はこうした場合、〈非対称〉的に分離形が用いられる．

(53)　a．太郎が［花子の頭］をなぐった．
　　b．太郎が花子をなぐったのは頭（を）だ．
　　c．太郎が頭をなぐったのは花子だ．（Kuroda（1988））

(54)　John hit Mary on the head.

8．結語

XP-NP 連鎖は〈存在〉に関わる連鎖である．XP-NP 連鎖（ト書き連鎖）は全体としてモノとコトの意味に対するゲシュタルトをなし（cf. ウサギアヒル）、構文的には名詞句としての側面と節に対応した側面の〈両義性〉を持つ可能性がある．こうした構文的特徴は、この連鎖が〈分離〉と〈統合〉の間の緊張関係の上に成り立つアンビバレント（両義的）な性質をもつためである．本論では、この両義性を異質のものの間に〈同質性〉をみる〈対称性〉の論理に則して考えた．これは認知意味論などいわれている以上に身体性と関連している．〈全体〉と〈部分〉、〈中心〉と〈周辺〉、〈主語〉と〈述語〉など、「分離」（区別）の志向性をもつ〈非対称的〉な捉え方の基礎に〈対称性〉を想定し、実際の言語表現は、この 2 つのベクトルのバランスの上で成り立っていることを論じた．XP は NP の〈今〉、〈ここ〉における位相（局面）をあらわすという意味で NP の総体の部分でもあるが、同時に変化する流動体全体としての NP と同一である．位相には、「瞬間」という形で捉えた場合（端的な例は写真キャプション）から〈動き〉に伴う時間的な幅がある場合がある．

XP-NP 連鎖はモノ（物）としての存在体というよりも運動体である．それは(35)のような例に端的にうかがえる．運動体としてのありようは、「もの」と

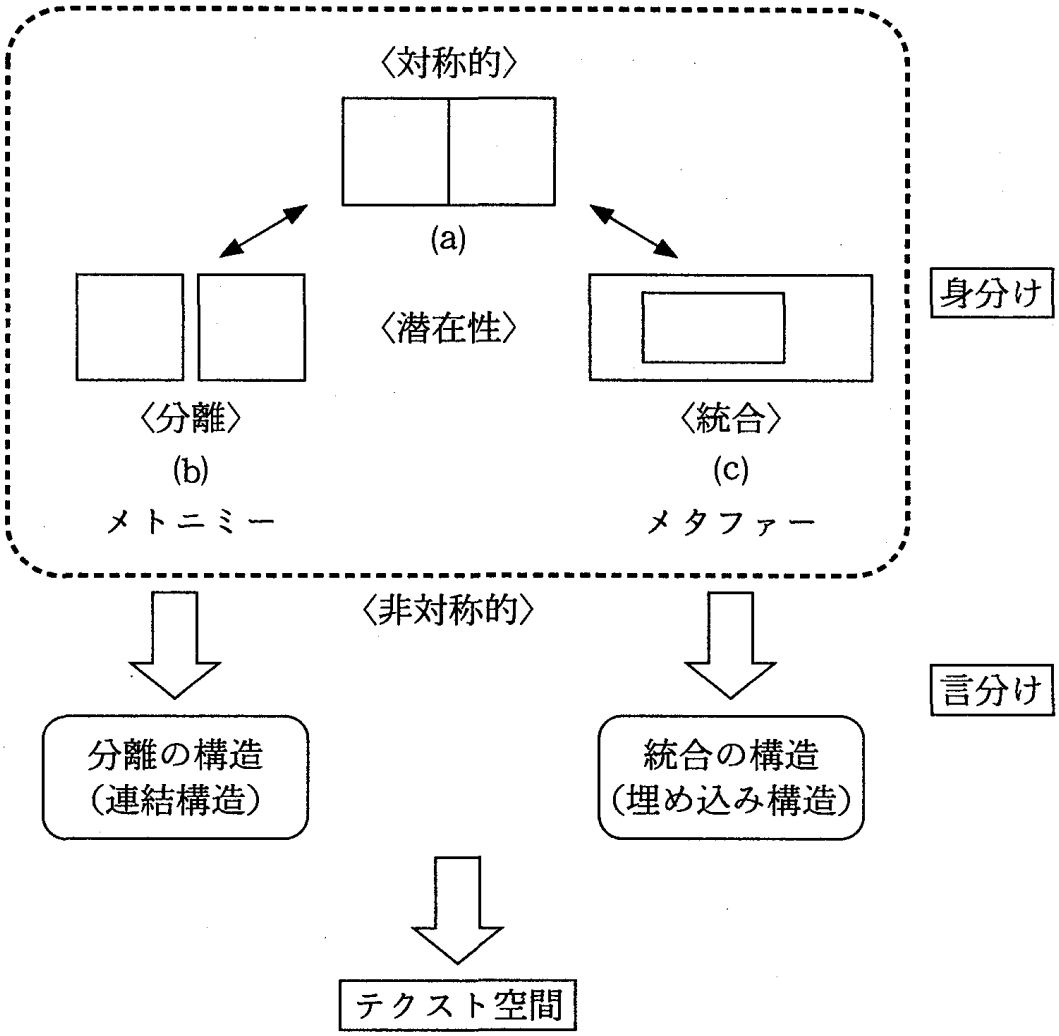
してでなく、「こと」としてのありようである．この連鎖に「現場性」が反映するのもそのためである．「現場」には「つねならぬもの」が結びつく、そこには、安定に対する不安定、継続や反復に対して切断、一回きりであり、どうおこるか予測がつかない．それは変化を内包している．「語り」の表現にこの連鎖が用いられるのは、われわれを「現場」の視点で世界に導く作者の仕掛けである．

XP-NP 連鎖の表現とその意味の出自をここでは、「物語」に対する「物語る」という言語行為の原初性と関連づけた．「物語」とはすでに完結した全体という「実体論的概念」であり、「物語る」とは物語るという行為を通して、生起した出来事を人間的時間の中に組み込むことができる．ここに「語り」の文体としての XP-NP 連鎖の意味と形式の諸性質の発生の源がある．

言語の志向性を次の 3 つの層に分けた場合、〈対称的〉な分節化と〈非対称的〉な分節化は、以下のような階層性として捉えられる．3 つの層とは、(a)身分け空間、(b)言分け空間、(c)テクスト空間である（この名称は、野家（2005）から）．テクスト空間における意味は、〈図〉と〈地〉（あるいは、〈中心〉と〈周辺〉）の間の有機的で流動的な関係によって構成されている．言語による分節化は「首なし」の身体（つまり自己）が客体化されるのに対応した分化・分節化を基盤としている（XP を出発点とするということ）．言語表現は、〈対称性〉と〈非対称性〉の志向性の緊張関係の上で成り立っているということができる．(53)のようにまとめられる．さらに出発点として未分化な図式は除いてある（cf. (45)）．

従来、〈一語文〉とされてきた XP-NP 連鎖も具体的用法の背後の原初性を考えると、単純にそうとは言えない．XP-NP 連鎖は〈自己〉の問題ともつながるのである．この点を含めまだ、論を尽くしていないところがあり、Part 2 の課題である．

(53)



＊＊＊

(註)

1．ここで上田（1991: 326-7）の次のような言及が参考になる（西田幾多郎の場所としての意識を述べるところである）．要点をあげれば次のようになる．日本語で「鐘の音が聞こえます」というとき、意識に鐘の音が響いている．鐘の音が響いているそのことがそのままあらわになっている．その場所が意識ということである．西田にとって意識とは即ち意識野、すなわちフィールド（場所といってよい）としての意識である．このように意識されているということそれ自体が「私」ということである．

2．〈現場〉には「つねならぬもの」が結びついている．不安定で特定的で予測のつかない緊張感が伴う．「場」との違いはここにある．例えば「殺人の現場」というが「殺人の場」とはいわない．「いこいの場」というが「いこいの現場」とはいわない（小田実『われ＝われの哲学』）(18)も参照のこと．

参考文献

Bolinger, Dwight. 1967. "Adjectives in English: attribution and predication," *Lingua* 18, 1-34..

_____. 1977. *Meaning and Form.* Longman.

Cinque, Guglielmo. 1995. *Italian Syntax and Universal Grammar.* Cambridge Univ. Press.

Declerck, Renaat. 1981. "Pseudo-modifiers," *Lingua* 59, 209-246.

_____. 1982. "The triple origin of participial perception verb complement," *Linguistic Analysis* 10, 1-26.

Felser, Claudia. 1999. *Verbal Complement Clauses,* John Benjamin.

Foley, William and Richard Van Valin. 1984. *Functional Syntax and Universal Grammar,* Cambridge: Cambridge Univ. Press (CUP).

Gee, James. 1977. "Comments on the paper by Akmajian," P.W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian (eds.) *Formal Syntax,* 461-481. Academic Press.

ハンソン、N. R. 1986.『科学的発見のパタン』(村上陽一郎（訳)）講談社学術文庫.

Hopper, P. and E. Traugott. 1993. *Grammaticalization.* CUP.

ホーレンシュタイン・エルマー. 1984.『認知と言語』村田純一他（訳). 産業図書.

檜垣立哉. 2005.『西田幾太郎と生命科学』講談社新書.

廣瀬幸生. 2001.「話し手概念の解体から見た日英語比較」筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト. 723-755.

本多　啓. 2005.『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.

池上嘉彦. 2000.『日本語論への招待』講談社.

木村　敏. 2000.『偶然性の病理』岩波現代文庫.

_____. 2005.『関係としての自己』みすず書房.

熊野純彦. 2005.『メルト＝ポンティ』NHK 出版.

Kuroda, S.-Y. 1988. "Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese," Poser, W.J. (ed.) *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax,* Stanford, CSLI. 103-143.

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things.* Univ. of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Linguistics in the Flesh.* Basic Books.

Langacker, Ronald. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar.* vol. 1. Stanford University Press.

_____. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar.* vol. 2. Stanford University Press.

丸山圭三郎.『ソシュールを読む』岩波書店.

メルロ＝ポンティ. 1967.『知覚の現象学』みすず書房.

森　雄一. 1998.「『主体化』をめぐって」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研

究論集』汲古書院. 186-198.
中村雄二郎. 1983.『西田幾多郎』岩波書店.
中沢新一. 2004.『対称性人類学』講談社メチエ.
Napoli, Donna. 1989. *Predication Theory*. Cambridge University Press.
西田光一. 2004.「個体と部分の連続性と日本語の「種類名詞」」『日本認知言語論文集』第4巻. 77-87.
西田幾多郎. 1934.『哲学の根本問題　続編』岩波全書.
_____. 1987.『西田幾多郎哲学論集』I　岩波書店.
西村義樹. 2000.「対照研究への認知言語学的アプローチ」『認知言語学の発展』　坂原茂（編）ひつじ書房. 145-166.
野家啓一. 2005.『物語の哲学』岩波現代文庫.
尾上圭介. 1973.「文核と結文の枠－「ハ」と「ガ」の用法をめぐって－」『言語研究』63, 1-26.
_____. 1977.「語列の意味と文の意味」『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』明治書院.
_____. 1982.「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1巻2号. 明治書院.
_____. 1986.「感嘆文と希求・命令文－喚体・述体概念の有効性－」『松村明教授古希記念国語学研究論集』明治書院. 555-582.
_____. 2004.『大阪ことば学』講談社文庫.
佐々木正人. 1994.『アフォーダンス－新しい認知の理論』岩波書店.
柴谷方良. 1990.「助詞の意味と機能について－「は」と「が」を中心に－」『文法と意味の間』くろしお出版. 281-301.
Tsubomoto, A. 2000. "Bare subject inversion constructions in Japanese," *Syntactic and Functional Explorations in Honor of Susumu Kuno.*. (eds.) Takami, K., Kamio, A. and J. Whitman (eds.). Kurosio Publishers. 249-274.
坪本篤朗. 1991.「現象（描写）文と提示文」石綿敏雄他（編）『文化言語学』三省堂. 564-578.
_____. 1992.「関係節と疑似修飾－状況と知覚－」『日本語学』（2月号）　明治書院. 76-87.
_____. 1995a.「場面の認知論－ト書き連鎖の日英語比較」『英語青年』（3月号）研究社. 617-619 & 640.
_____. 1996.「日英語の amalgam 構文の形と意味と語用論」第14回日本英語学会ワークショップ.「文法と語用論の接点：認知的観点から」発表.
_____. 1997.「文のタイプと日本語「ト書き」連鎖」『人文論集』48-1. 311-324.
_____. 1998.「文連結の形と意味と語用論」中右実（編）『日英語比較選書　第3巻：モダリテイと発話行為』研究社出版. 99-193.
_____. 1999.「モノとコトから見た文法：主要部内在型関係節とト書き連鎖」『日本

語学』（1月号） 明治書院. 26-40.
_____. 2000.「モノとコトから見た文法」筑波大学学位論文
_____. 2002.「モノとコトから見た日英語比較」『国際関係・比較文化研究』
_____. 2002.「再び、主要部内在型関係節構文」『ことばと文化』第6号. 27-44.
_____. 2004.「統合のスキーマと分離のスキーマ」中部言語学会第50回記念大会講演. 於 静岡県立大学
_____. 2005.「読むことを〈時間〉から考える」『英語青年』6月号. 144-145.
上田閑照. 1991.『西田幾多郎を読む』岩波書店.
山口明穂. 1989.『国語の論理』 東京大学出版会.
山田孝雄. 1937.『日本文法学概論』 法文館書店.
吉岡 洋. 1997.『〈思想〉の現在形』講談社選書メチエ.